

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：32639

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770089

研究課題名(和文) 戦後 雑誌における文学者の美術批評に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic Research of the Relationship between Art Documentation by Literary Person and Magazines in Postwar Japan

研究代表者

鈴木 美穂 (Suzuki, Miho)

玉川大学・学術研究所・助教

研究者番号：40547915

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アジア・太平洋戦争後、文学者による西洋美術に関する美術批評がどのようにもたらされ、機能したかを明らかにしたものである。『藝術新潮』を中心とする雑誌メディアと小林秀雄等の文学者の美術批評を実証的に調査・検証・分析することで、文学者の美術批評が、転換期において、同時代の内外の文学・美術の動向や行政・制度の変化と連動し、さらに雑誌メディアの戦略の中で、美術史や文学史の枠組みを超えて影響力を有したことが具体的に確認された。本研究の成果は、刊行本として一挙に公開予定である。400字詰め換算800枚規模で、出版社の計画として社内承認され、2018年の刊行を目指している。

研究成果の概要(英文)：This study started with a 3-years plan, of which this is the last year. The study has proceeded smoothly as planned. Through this research project I substantially clarified the relationship between Art documentation and Art magazines in Postwar Japan. Especially I chose to focus on the important art journal "Geijyutsu - Shincho", analyzing how and why its editors introduces to their readers an enormous information of European Arts, and I chose to focus on Art documentation by Literary Person, Hideo KOBAYASHI who was the most important art critic in Postwar Japan. I will compile and publish the results of this study as a book (Miho SUZUKI, Art Criticism of Hideo KOBAYASHI, 2017-2018 to be published).

研究分野：日本文学

キーワード：日本文学 比較文学 戦後雑誌 美術批評 文学と美術 比較芸術学 小林秀雄 フランス

## 1. 研究開始当初の背景

アジア・太平洋戦争敗戦後の1945～50年代研究は、現在に直結する、戦後、構築された体制の様々な面を考える上でも重要な研究課題と言える。しかし、近年、着実に進展している状況ではあるものの、未解明の部分も大きい。

中でも、文学者による美術批評も含めた「文学と美術」というテーマは、戦後文化生成上の影響力の面から考えても重要と言えるが、本研究課題のように「美術批評」をも文学テキストと捉えて具体的に検証する試みは、戦後に關してはなされてこなかった。

また近代文学研究において、批評ジャンルの研究は周縁に置かれ、戦後文学・文化の編成上、重要な役割を果たしたにもかかわらず、発展途上にあるのが現状である。このような美術批評研究、批評研究の現状は、日本のみならず、海外でも同様である。

以上のような研究背景のもと、研究代表者はこれまで、小林秀雄が戦後集中的に取り組んだ、非言語芸術を対象とする批評研究に従事する中で、「文学と美術」のクロスジャンルの研究、また、日本の戦後文化生成における批評研究の重要性に注目し、研究を続けてきた。

今回の研究課題は、クロスジャンルの研究の中でも、社会的事象や歴史的事実に関わる事象を視野に入れたうえで、戦後文化形成の過程の問題を一層深く、総合的に検証し、さらに戦後文化形成の過程解明とそのメカニズムを追究する目的のもと、着想に至ったものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、下記の2研究項目を柱として、文学者による美術批評の機能と戦後日本の文化生成との連関に着目し、その意味について具体的に検証・分析することを目的としてきた。

- (1) 雑誌『藝術新潮』編集戦略とその意義の解明 各美術関係雑誌との比較検討
- (2) 小林秀雄を中心とする文学者による美術批評の実証的検証・分析

とりわけ、批評家・小林秀雄を中心とする、文学者による美術批評に焦点をあて、『藝術新潮』を中心とする美術・文学・総合雑誌の試みを検証することにより、これまでの美術史研究・文学研究の枠組みでは注目されてこなかった「文学者による美術批評」テキストそのものを俎上にのせ、検証してきた。

また併せてその発表媒体とされた雑誌メ

ディアを調査・検証することによって、文学者による美術批評がどのように機能したかを解き明かし、その意義を検討することで、戦後文化生成の過程解明の基盤構築を目指してきた。

## 3. 研究の方法

本研究は、戦後の西洋文化受容に大きな役割を果たした文学者による美術批評というクロスジャンルの対象を、その受容の場となった雑誌に着目し、美術ジャーナリズム・美術行政等の文化状況に目配りしつつ、テキストを具体的・実証的に検討することで、戦後文化生成過程の一端を解明する方法をとってきた。

中でも、総合的・横断的に芸術を捉えた新しい芸術世界創出を目指した雑誌『藝術新潮』に焦点をあて、『美術』『美術手帖』等この時期に復刊・創刊した美術雑誌群の特徴・編集戦略との比較を行った。それにより、『藝術新潮』に発表された小林秀雄を中心とする文学者による美術批評をめぐる受容の現場を、時代状況に照らし合わせ、具体的に検証することで、戦後、制度的転換が進む中、いかにこれらの批評が機能していったのかも明らかにしてきた。

また「美術批評」の諸テキストを、文学作品として扱うことによって、テキスト分析を可能とし、それが戦後社会・文化の形成や美術界、文学界の状況とどのような関係性を持っているか、同時代の文脈における分析をおこなってきた。

方法論としては、文学理論、美術史学の作品研究、メディア研究を総合的・統合的に用いてきた。

基本的に小林秀雄を中心とする、同時代の文学者の美術批評テキストを、多くの雑誌メディアから網羅的に調査・収集する方法を取り、そのうえで、上記の方法論を用いて分析・検討を進めてきた。

## 4. 研究成果

既に述べたように本研究は、戦後の日本文化生成過程解明の第一歩として、状況が激変した西洋文化受容の問題を、文学者による美術批評に焦点をあてて検討・究明するものである。具体的には以下の3項目について、詳細な検討による解明を目指してきた。

- (1) 発表媒体としての雑誌の種類・性質・編集戦略
- (2) 美術情報の発信者である文学者に関する情報
- (3) 具体的な美術批評テキスト

三年間の助成期間のうち、初年度は 1945～50 年代の戦後最初期の西洋美術雑誌・総合雑誌における美術情報および美術をめぐる言説、美術をめぐる文化状況についての情報・資料調査・収集を行った。

資料調査・収集ののち、敗戦後に美術をめぐる環境が大きく変化した中での、各美術雑誌と総合雑誌における美術情報・美術をめぐる言説、また、国内での美術展や行政のあり方など、美術をめぐる文化状況について、一定の整理を行った。対象としては、芸術総合雑誌『藝術新潮』を軸とし、『美術』、『三彩』、『美術手帖』、『アトリエ』、『文藝春秋』等の美術関連雑誌、美術関連記事の多い総合雑誌を比較対象とした。なお、これら雑誌の調査に関しては、本研究課題申請段階より準備を進めており、採択時には各雑誌の比較へと研究を進められる状況にある程度整えていた。

これらの調査・整理は、本研究の基礎資料としてのみならず、戦後最初期における西洋美術受容のありようを取りまとめた作業として意義あるものと言える。さらに、文学者による美術批評検証に向けて、雑誌メディアの編集戦略との関連で、具体的に検証を行い、その可能性を指摘した。

このうち、雑誌『藝術新潮』の編集戦略と、小林秀雄の美術批評掲載をめぐる検討の成果は、「小林秀雄と初期『藝術新潮』」(『国文目白』第 54 号、2015、pp.116-123)として公表した。

二年目は、資料調査・分析を継続しながら、文学と美術を中心とする文化状況、および小林秀雄を中心とする文学者の美術批評を軸とした調査・研究に取り組んだ。

戦後最初期に激変した文化状況に関して、その変化の様相も含め、文学と美術という観点から雑誌メディアを中心に調査・整理を継続することで、本研究の基礎資料と戦後最初期の西洋美術受容のあり方の検証基盤を構築した。

また、小林秀雄を中心とする作家の蔵書、フランスを中心とする渡航時の軌跡を、オルセー美術館資料室や国立美術館資料室等を含めた内外の図書館や資料室を利用しながら具体的に調査し、その受容の現場と美術批評の関係性を詳細に検証・分析する基盤構築を進めることができた。

最終年度にあたる三年目は、文学者の欧州体験・文献渉猟の調査と美術批評の実証的検証・分析を完成させるべく、調査・分析と執筆を行ってきた。戦後最初期の雑誌メディアと小林秀雄を中心とする文学者の美術批評の膨大な資料調査と整理を進め、執筆も並行してきた。

本研究課題は文学者の美術批評を、美術史の枠組み、あるいは文学史の枠組みに限定して捉えるのではなく、戦後転換期の同時代の内外の文学・美術の動向との連動、また行

政・制度の転換を含む同時代状況などを総合的視点で検証する、未開拓の仕事へと発展しており、その規模は当初の想定以上のものとなっている。

本研究の最後には、研究成果の公開を目標としているが、本研究を含む内容の単行本『小林秀雄の芸術批評 文学・美術・メディア』(仮題)の出版が出版社の計画としても社内承認されており、400 字詰め原稿用紙換算で約 800 枚規模の予定である。本課題の助成期間末までに 3 分の 2 以上の執筆は終えている段階である。

以上のように、本研究テーマはより発展する可能性を見せている。そのため、発展的研究課題は科学研究費挑戦的研究(萌芽)に申請中である。その双方の課題を含む形で、近日中に、成果を公開するべく執筆を進めている。また、本研究にかかわる資料所蔵者・著作権継承者との関係もあり、本研究に関しては単行本にて一挙に公開することを目指しており、論文および口頭発表を控えていることを申し添える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

鈴木美穂「小林秀雄と初期『藝術新潮』」『国文目白』(日本女子大学国語国文学会) 査読無、第 54 号、2015、pp.116-123.

[http://mcm-www.jwu.ac.jp/~nichibun/thesis/kokubun-mejiro/KOME\\_54\\_11.pdf](http://mcm-www.jwu.ac.jp/~nichibun/thesis/kokubun-mejiro/KOME_54_11.pdf)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕  
ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者  
鈴木美穂 (SUZUKI MIHO)  
玉川大学・学術研究所・助教  
研究者番号：40547915

(2) 研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし

以上